栗源町外部台遺跡

主要地方道成田・小見川・鹿島港線
事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書

1986

千葉県土木部
財団法人 千葉県文化財センター

栗源町外部台遺跡

主要地方道成田・小見川・鹿島港線
事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書

1986

千葉県土木部
財団法人 千葉県文化財センター

序　　文

栗源町に源をもち北総台地を南下する栗山川沿いには，古墳をはじめとした数多くの遺跡が所在しております。

近年，交通量の増加に伴う道路改良が必要となり，千葉県土木部は，主要地方道成田・小見川・鹿島港線建設を計画しました。

そこで千葉県教育委員会では，事業地内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて千葉県土木部と協議を重ねた結果，事業の性格上止むを得ず発掘調査による記録保存の措置を講ずることになりました。

発掘調査は，(財)千葉県文化財センターが当たることになり，千葉県教育委員会の指導のもとに関係機関と詳細な打合わせを行い，昭和60年１月から２月まで実施しました。その結果古墳１基と歴史時代の竪穴住居跡を検出することができ，今回，その成果を報告書として刊行する運びとなりました。

本書が，学術資料としてはもとより地域を知る教育資料として広く活用されることを期待するものであります。

終りに，発掘調査から整理に至るまで多大な御協力，御支援をいただきました千葉県土木部，千葉県香取土木事務所，千葉県教育庁文化課，栗源町教育委員会をはじめ，関係諸機関にお礼を申し上げるとともに，酷寒の中で調査に協力された調査補助員の皆様に心から感謝を表します。

昭和61年３月

財団法人　千葉県文化財センター

理事長　山本　孝也

例　言

1．　本書は，主要地方道成田・小見川・鹿島港線道路事業の実施に伴う栗源町外部台（ソベダイ）遺跡の発掘調査報告書である。

2．　発掘調査及び整理作業は，千葉県教育委員会の指導のもとに，千葉県土木部道路建設課との委託契約に基づき，財団法人千葉県文化財センターが実施した。

3．　発掘調査は昭和60年１月１日から同年２月28日まで下記の担当により実施した。調査部長　鈴木道之助，部長補佐　岡川宏道，班長　高橋賢一，調査研究員　伊藤智樹

4．　整理作業は，昭和60年９月１日から同年10月31日まで下記の担当により実施した。調査部長　鈴木道之助，部長補佐　岡川宏道，班長　高橋賢一

5．　本書の執筆・編集は，高橋賢一，伊藤智樹がおこなった。

6．　本遺跡のコードは，346－001とした。

7．　古墳の名称は，栗源町教育委員会との協議により，外部台古墳群の中で確認されている１～５号墳のつづき番号として外部台６号墳とした。

8．　本書に使用した地形図は，以下のとおりである。

１：25,000　国土地理院著作，発行　岩部（ＮＩ－54－19－６－３）・新東京国際空港（ＮＩ－54－19－10－１）

9．　発掘調査の実施から報告書の刊行に至るまで，下記の諸機関，諸氏をはじめとして多くの方々からの御指導，御協力を賜りました。ここに謝意を表します。

千葉県土木部道路建設課，県香取土木事務所，千葉県教育庁文化課，栗源町教育委員会社会教育課

本文目次

序　文
例　言
第1章　序章 …… 1
1．遺跡の位置と歴史的環境…… 1
2．調査の方法と経過…… 4
第2章　検出した遺構と遺物…… 6
1．古墳…… 6
2．住居跡…… 10
3．土壙…… 12
4．グリッド出土の遺物…… 20
第3章　まとめ …… 22

挿図目次

第1図　遺跡の位置と周辺の主な遺跡…… 3
第2図　遺跡地形図及び遺構分布図…… 4
第3図　遺跡基本土層図…… 5
第4図　外部台6号墳周溝実測図 …… 7
第5図　外部台6号墳主体部実測図 …… 8
第6図　外部台6号墳出土遺物実測図 …… 9
第7図　1号住居跡実測図…… 11
第8図　1号住居跡カマド実測図…… 11
第9図　1号住居跡出土遺物実測図…… 12
第10図　1，2，3号土壙実測図…… 14
第11図　4，5，6号土壙実測図…… 15
第12図　7，8，9，10，13号土壙実測図…… 17
第13図　11，12号土壙実測図…… 19
第14図　グリッド出土の石器実測図…… 20
第15図　グリッド出土の縄文式土器拓影図…… 21
第16図　遺跡南側での表採土器実測図…… 21

表目次

表1　外部台遺跡周辺遺跡一覧……2

図版目次

図版1　外部台遺跡遠景，遺跡近景
図版2　外部台6号墳主体部断面，主体部底面検出状況，主体部完掘状況
図版3　外台部6号墳全掘状況，周溝北側掘り込み状況，周溝東側掘り込み状況
図版4　1号住居跡全景，1，2号土壙全景
図版5　3，4，5号土壙全景
図版6　6，8，9号土壙全景
図版7　10，11号土壙全景，同南側壁面掘り方状況
図版8　12，13号土壙全景
図版9　遺構出土及び表採の遺物
図版10　グリッド出土の遺物

第1章　序　章

1　遺跡の位置と歴史的環境

外部台遺跡は，千葉県香取郡栗源町大字岩部字向2102－4番地他に所在する。栗源町は，下総台地北東部のいわゆる北総台地のほぼ中央部に位置し，佐原市，小見川町，山田町，多古町，大栄町に隣接している。遺跡は，栗源町の市街地の北西約1kmの標高約40mを測る台地上にあり，台地の西側を北から南へと栗山川が流れている。栗山川は，栗源町高萩地先を源として，町の中央部を南下して，多古町で多古橋川，借当川，高谷川などの支流と合流し，九十九里海岸平野を経て太平洋に注ぐ河川で，その流域は肥沃な水田地帯を形成している。遺跡周辺の台地は，標高30m～42mを測り，緩やかな起伏となっているが，北部では，栗山川水系と利根川水系の分水界をなしている。

こうした栗山川流域の台地上には，古墳群を中心として数多くの遺跡が確認されているが，発掘調査を実施した遺跡が少ないため，個々の遺跡の概要は明らかにはなっていない。本遺跡の周辺では，縄文時代6か所，古墳時代31か所の遺跡が，栗山川の流域に分布しており，先土器時代，弥生時代の遺跡は未だ確認されていない。縄文時代の遺跡は中期から後期に属する遺跡が多く，南遺跡（26）では独鈷石が出土している。古墳時代の遺跡は，31か所のうち散布地（集落址）7か所，古墳群および古墳が21か所，横穴墓3か所が認められる。集落跡では，岩部遺跡（39），石野遺跡2（11），矢沢遺跡（23）等があり，中でも岩部遺跡では，和泉期の住居跡3軒が検出されている。古墳は，栗山川の主流を望む台地上と，その開折を受けた谷津に面した台地上に分布しており，多くが古墳群を形成しているが，単独で存在している古墳もある。本遺跡も，外部台古墳群として把えられている一群の中に位置する遺跡で，調査によって明らかとなった方墳1基の他，円墳5基で構成されている。本遺跡の南約1kmには，前方後円墳の向古墳（3）があり，北方には，円墳3基で構成される西野古墳群（6）がある。また台の内古墳（20）は昭和58年に調査が実施され，径20.5mの円墳に2基の箱式石棺による主体部が検出され，直刀，鉄鏃などが出土している。古墳群の多くは，前方後円墳，円墳で構成され，方墳を伴うものは少ない。(注1) 前方後円墳の規模は，柏熊古墳群（36）中のしゃくし塚の全長80mが最大で，他は50m前後の中型の古墳が多い。円墳の規模は30m程度の小円墳が多く存在している。方墳では，大塚（19）が最大で1辺約80mの規模を有しており，金の鍬機が埋蔵されているという伝説が伝えられている。

奈良～平安時代の遺跡は，本遺跡を含めて2か所が確認されている。本遺跡と栗山川を挟んで対岸に位置する根崎遺跡（13）では，布目瓦の散布が確認されている。この時期には，この

地域が匝瑳郡に属していたと推定されている。8世紀中頃には，正倉院に現存する布に「下総国匠紗郡磐室郷戸主大伴部……戸口大伴部足輸調布……一端，天平十二年十月」の記録がみえるところから，現在の栗源町岩部が磐室郷であったと推定されている。9世紀には桓武天皇の御子，葛原(カツラハラ)親王の荘園となり，以後平良業の所領を経て12世紀中頃(注2)には多古町千田を中心とする千田荘の一部となっていく。この頃には，千葉一族の勢力範囲となり，遺跡の南東には，岩部五郎常基が拠った岩部城址（17）が存在している。この他中世城址として荒北砦址（12）が，遺跡の西に存在している。

注

注1　平岡和夫他『台の内古墳－千葉県香取郡栗源町・岩部所在古墳調査報告書』山武考古学研究所　昭59

注2　『栗源町史』栗源町役場　昭49

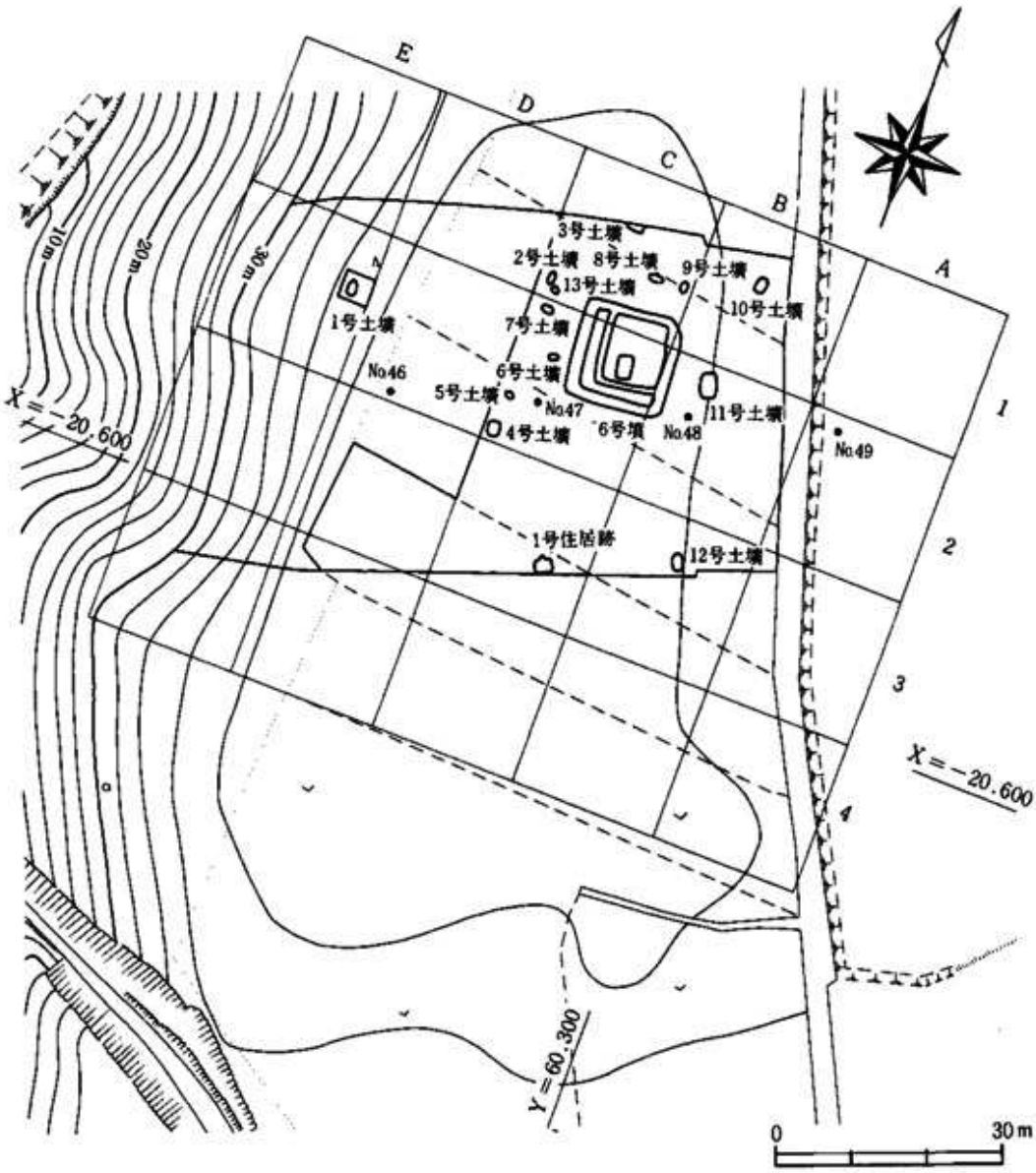
表1．外部台遺跡周辺遺跡一覧

No.	遺跡名	時代	備考	No.	遺跡名	時代	備考
1	外部台遺跡	縄文 古墳～平安	円墳5基，方墳1基	21	コジャ古墳	古墳	円墳，石棺出土
2	安寺山塚群	不詳		22	岩部古墳群	古墳	長谷古墳他，前方後円墳3基，円墳2基
3	向古墳	古墳	前方後円墳	23	矢沢遺跡	古墳	散布地
4	城郷遺跡	中世	屋敷跡（消滅）	24	矢沢古墳群	古墳	前方後円墳1基 円墳9基
5	三本松古墳	古墳	円墳	25	浅間台古墳	古墳	円墳，石棺出土
6	西野古墳群	古墳	円墳3基	26	雨遺跡	縄文・古墳	散布地，独鈷石出土
7	ママタ遺跡	縄文	散布地	27	瀬谷台古墳群	古墳	前方後円墳1基 円墳4基
8	助沢遺跡	縄文	散布地	28	子の神横穴群	古墳	横穴墓（消滅）
9	森山遺跡	古墳	散布地	29	小瀬谷横穴群	古墳	横穴墓（消滅）
10	石野遺跡1	縄文	散布地	30	平山古墳	古墳	方墳
11	石野遺跡2	縄文・古墳	散布地	31	五十塚1,2,3号	古墳	円墳3基
12	荒北砦址	中近世	城跡，土塁，空壕	32	谷三倉古墳群	古墳	円墳3基
13	根崎遺跡	平安	散布地，布目瓦	33	堤台古墳群	古墳	円墳6基
14	ハサマ遺跡	古墳	散布地	34	大山・田鳴谷古墳	古墳	前方後円墳1基 円墳1基
15	宿原古墳1・2	古墳	円墳2基	35	馬林古墳群	古墳	円墳4基
16	馬場横穴群	古墳	横穴墓（消滅）	36	柏熊古墳群	古墳	前方後円墳1基 円墳5基，方墳1基
17	岩部城址	中世	城跡，土塁，空壕	37	小三倉古墳群	古墳	円墳2基
18	飯土井遺跡	古墳	散布地	38	山王古墳群	古墳	前方後円墳4基 円墳9基
19	大塚	古墳	方墳 金の鶏機埋蔵の伝説	39	岩部遺跡	古墳	和泉期集落跡 住居跡3軒
20	台の内古墳	古墳	円墳，石棺2 昭和58年調査　注1				

第1図　遺跡の位置と周辺の主な道路

2　調査の方法と経過

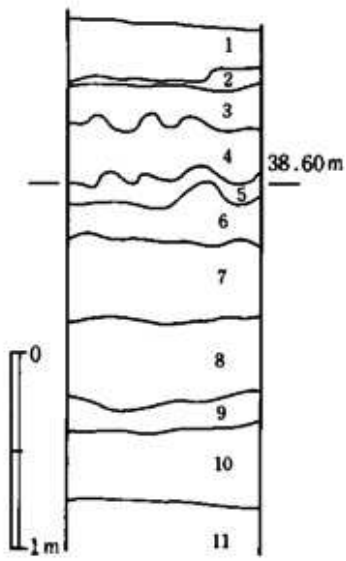
発掘調査は，当初3,000㎡の対象面積の範囲で，公共座標にのる道路中心杭から遺跡の基準座標を導き，これに沿って20m×20mの大グリッドを設定した。この大グリッドは，遺跡の東から西へA～E，北から南へ1～4と番号を付し，北東隅からA1区，A2区・・・と呼称することにした。また各大グリッドをさらに4m×4mの小グリッドに分割し，各小グリッドを北



第2図　遺跡地形図及び遺構分布図（1/1,000）

西隅から東へ00，01，02……のように全体に25分割とした。従って各小グリッドの呼称は，A1－00，A1－01……となる。道路中心杭の公共座標は，№47が，X＝－20573.146，Y＝60265.886，№48が，X＝－20567.738，Y＝60285.140である。以上のようなグリッドを基本として，遺跡内での遺構の分布を把握するため，3,000㎡のうち300㎡について2m×2mの試掘グリッドを設定し，先土器時代も含めた遺構，遺物の確認調査を実施した。その結果，遺構の大部分が遺跡の中央から東側に偏在していることが判明したため，この範囲の1,556.18㎡について本調査を実施することにした。先土器時代の試掘グリッドでは，武蔵野ローム層上面まで掘り下げたが遺物は検出されなかった。また確認調査の過程で，本遺跡の表土下に新期テフラ層の堆積が確認されたため，遺構の検出，確認を新期テフラ面と立川ローム層上面の2段階に分けて行った。検出された遺構については，遺構の種別毎に番号を付した。遺物は，遺構の場合，原則として全位置とレベルを記録し，0001,000 2と4ケタの数字を使用した。また遺構に伴わない遺物は各小グリッドを一単位として層ごとに一括し，特殊なものについては位置，レベルを記録して取り上げた。

遺構の実測は，原則として遣り方実測で行ない，古墳の全測図のみ平板実測を用いた。縮尺は必要に応じて変更したが，住居跡1/20，土壙1/10，古墳主体部1/10として実測を行った。また図面に付した方位はすべて座標北を基準とした。



遺跡土層図

第1層黒褐色土……現表土層、耕作土。
第2層橙褐色土……新期テフラ層で軟質。平均的な厚さは20cm前後である。
第3層暗褐色土……20cm前後の厚さで堆積しており縄文時代の遺物包含層
第4層赤褐色土……いわゆるソフトローム層である。立川ローム層最上層で軟質である。
第5層赤褐色土……硬質でクラックが発達する。赤色のスコリア、黒色の微粒子を若干含む
第6層黄褐色土……硬質で上、下の層に比べかなり明るい色調を示す。赤色スコリアを含む
第7層暗赤褐色土…全体に暗い色調を示す。赤色スコリア、黒色の微粒子を多く含む。
第8層赤褐色土……硬質で第11層に比べやや明るい黒色の微粒子は目につかなくなる。
第9層赤褐色土……硬質であるが上層に比べるとやや軟化している。小砂利を若干含む
第10層　褐色土……くすんだ色調を示すローム層でやや軟質となる。
第11層　褐色土……軟質なロームで水分を含むが割合パサパサした状態である。

第3図　遺跡基本土層図（1C-10グリッド）

第2章　検出した遺構と遺物

1　古墳（外部台6号墳）（第4，5図・図版2，3）

本古墳は調査区のほぼ中央に位置している。調査前の現況では墳丘は削平を受けて失われており，確認調査の結果方形の周溝を有する古墳であることが判明した。古墳の名称は外部台古墳群中に所在するため，新しい番号を付し外部台6号墳と呼称する。なお調査の進捗に伴い，周溝が大小2つ重複していることが判明したが当初から1遺構として扱ったため説明上大形の周溝を1号，小形の周溝を2号として記述する。

1号周溝

本周溝は全体として正方形に近い平面形を呈する。各辺は直線的で各隅とも直角に掘り込まれている。2号周溝とは北辺から東辺にかけて重複している。外側での規模は，南辺13.56m，西辺14.48m，北辺で14.16m，東辺が13.74mを測る。幅は南辺側中央で1.48m，西辺側中央で1.36mを測る。壁は底面から直線的に外方に開く立ち上がりをみせ，深さは西側で52～42cm，南側で51～39cmを測る。底面はやや起伏が認められ，全体に軟質である。耕作によって攪乱を受け遺存状態は良くない。

出土遺物は少なく，南西隅で須恵器甕の口縁部破片が出土している。

覆土は黒色土，褐色土が主体である。自然堆積の状態を示す。

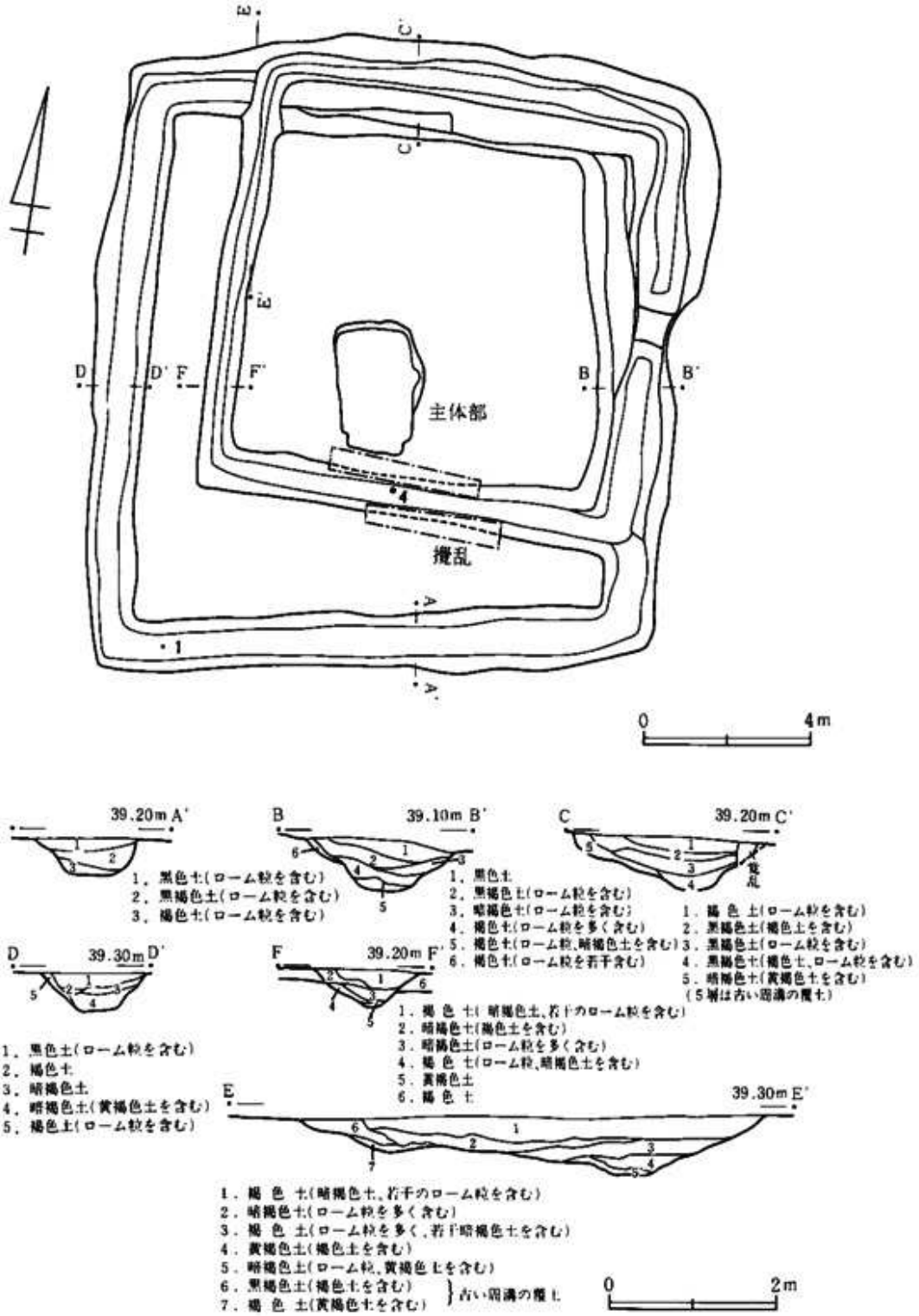
2号周溝

1号周溝の西辺と南辺の内側を廻り北辺と東辺は重複関係にある。平面形は正方形を呈し，南辺と北辺の中心線の方位が1号周溝よりやや真北に近い方位をとる。重複する北側と東側では1号周溝より深く掘り込まれており東辺中央にはブリッヂを設けている。1号周溝との新旧関係はC－C'セクション，E－E'セクションの土層断面の観察から本周溝の方が新しいものと思われる。

1辺の規模は西辺10.74m，南辺11.42mを測る。東辺および北辺はこれと大差がない規模である。幅は西辺から南辺で1.36～1.06m，深さは西辺から南辺で59～45cm，東辺から北辺で91～66cmを測る。壁の立ち上がりは1号周溝と同様に直線的に外方に開いている。ブリッヂは上端での幅76cm，底面からの高さ48cmを測る。底面は平坦で，起伏が少ないが重複部分では高低差が認められる。また南辺から西辺の溝は攪乱が著しいため全体を検出できなかった。

出土遺物は少なく，主体部の南側にあたる周溝中で鉄鏃の破片（第6図4）が覆土中より出土したのみである。

覆土は，褐色土，黒褐色土が主体であり1号周溝と同様の状態であった。

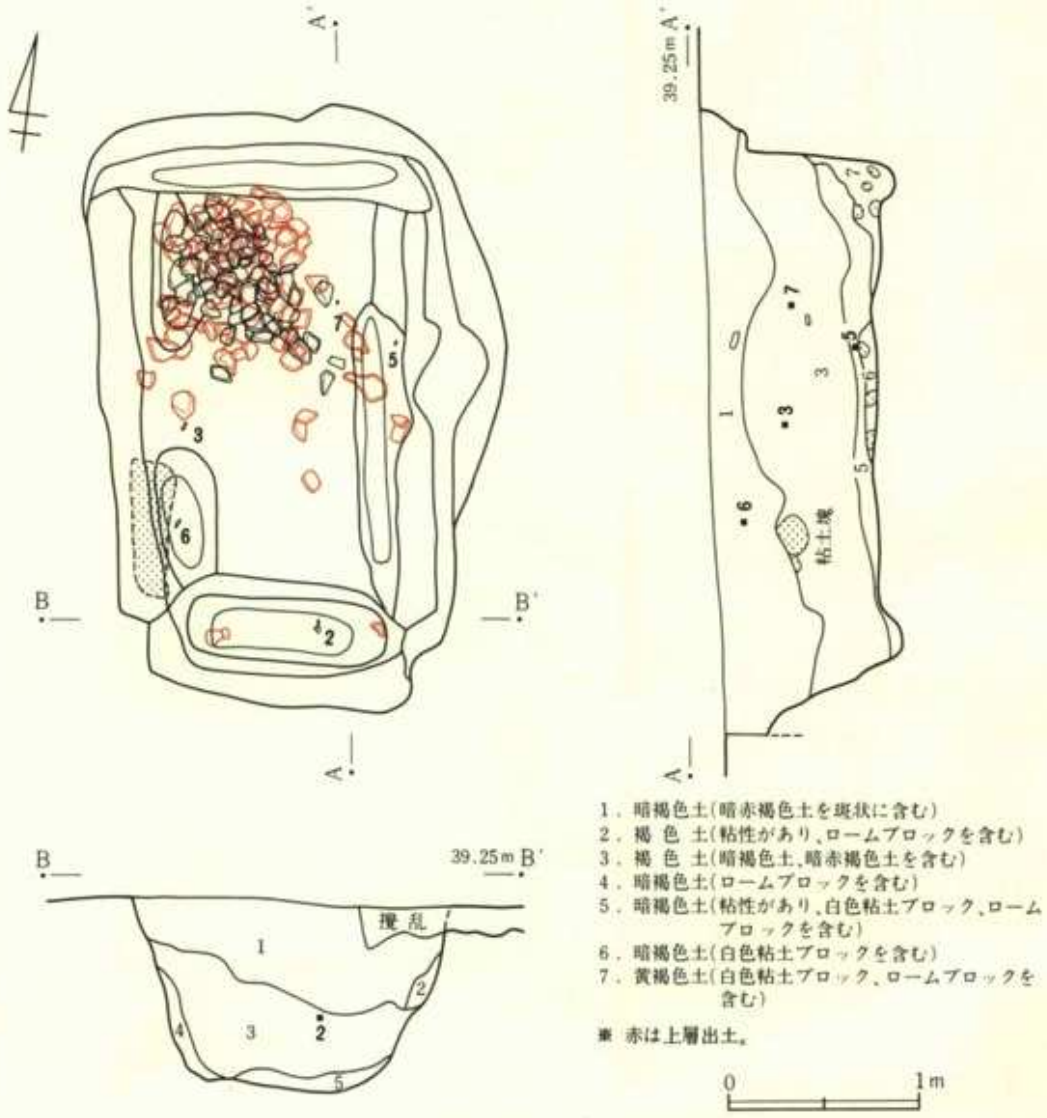


第4図　外部台6号墳周溝実測図（1/160・1/80）

主体部

1号周溝の範囲のほぼ中央で検出された土壙で，2号周溝南辺に近接している。検出時の現況は上面に攪乱痕があり埋葬施設の部材と思われる雲母片岩の破片が露出していた。調査の結果，主体部に用いられた主要な石材はすべて抜きとられ，土壙内には床に敷かれていたと思われる石片が北側によせられた状況であった。このため埋葬施設がどのような形態であったのかは全く不明である。

土壙の平面プランはほぼ隅丸長方形を呈する。南側が張り出し，東側は一部攪乱のため上端が歪んでいる。長軸長は3.07m，短軸長は1.97m，南側の張り出し部は1.38mを測る。長軸の中心線上での方位はN－16°－Wとなる。壁はしっかりとした掘り方で，検出面からの深さは1.09



第5図　外部台6号墳主体部実測図(1/40)

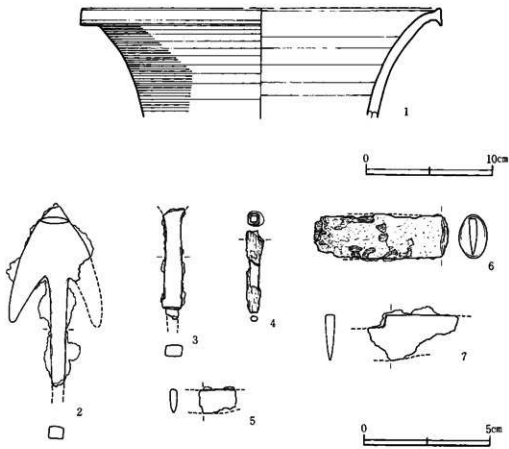
～0.97mである。床面は堅くしまりがあり若干起伏が認められる。中央から北隅に拳大の平らな雲母片岩の石片が遺存していたが，寄せ集められた様な状況であった。石片の最下底には白色粘土が認められていることから本来は埋葬施設の床面に敷かれていたものと思われる。また壁に沿って溝が掘り込まれている。西壁中央と北東側で一部途切れる。幅32～26cm，深さは12～7cmを測る。北壁側で最も浅く，南側の張り出し部で最も深い。

遺物は，鉄鏃，刀子が出土している。すべて欠損しており，覆土中に散在していた。

覆土は，暗褐色土，褐色土が主体であるが7層に区分された。床面および壁側では白色粘土がブロック状に認められている。北方向に寄せられた大量の石片，粘土ブロック，遺物の状態等をみると盗掘が大規模におこなわれた様である。

遺物（第6図・図版9）

1は須恵器甕の口縁部である。大きく外反し口唇部は折りかえされ，かえりは鋭角である。外面のロクロ目は明瞭に認められる。胎土は緻密で白色の細砂粒をごくわずかに含んでいる。焼成も良く，色調は濃灰褐色を呈する。推定径28.6cm，現存高8.55cmを測る。



第6図　外部台6号墳出土遺物実測図（1/3・2/3）

2～4は鉄鏃である。2は大形の長頸鏃で腸抉りが深い。刃部は両丸造りで先端と側辺を欠いている。篦被も完存していない。現存長69.5mm，刃幅22.6mm，厚さ2.4mmを測る。3は篦被と茎の一部である。わずかに刺状突起も認められるが錆化のため不明瞭である。現存長42.9mm，幅7.5mm，厚さ4.5mmを測る。4は茎の部分である。木質が付着している。現存長31.9mm，幅4.6mm，厚さ4.4mmを測る。

5～7は刀子である。5は刃部破片で，切先に近い部分と思われる。現存長14.55mm，幅8.4mm，背厚3.0mmを測る。6は茎の部分である。木質の把に装着してあり，表面には錆が浮き出している。現存長52.8mm，幅16.9mm，厚さ12.2mm，茎は厚さ3.0mm，幅13.7mmを測る。7は刃部から茎の部分である。茎は背の方から直角に切れこんでいる。現存長35.4mm，幅18.1mm，背厚3.7mmを測る。

2　住居跡

1号住居跡（第7，8図・図版4）

本遺跡において検出された唯一の住居跡である。調査区の南端，3C－18グリッドに位置する。遺構検出面は新期テフラ層上面である。耕作による攪乱を受け遺存状態は良くない。

平面形はやや隅の丸い長方形を呈し，カマドを通る住居跡の中軸線の方向はN－13°－Wをさす。規模は2.81m×2.43mを測る。壁は床面よりほぼ垂直に立ち上がり，深さ31～26cmである。

壁溝が幅15～10cm，深さ5cm前後で全周する。床面は起伏が少なく貼床となり，カマドから南側の住居跡中央部が周辺に比べて堅くしまっている。ピットは2か所で検出されている。P1は径26cm，深さ63cm，P2は径27cm，深さ18cmを測る。P1の掘り方はしっかりとした掘り方である。

カマドは，北壁の中央に灰白色の砂質粘土を部材として構築されている。西から東に斜めに横断するように耕作による攪乱を受け全体として遺存は良くない。壁外への掘り込みは階段状に掘り込まれ最奥部で23cmを測る。袖部は長さ78～66cm，高さ38cmで左袖には基礎として褐色土が充填されている。火床部掘り込みは床面から深さ15～13cmを測り，皿状を呈している。焚口部上部から坏の小破片と甑の底部片が出土している。

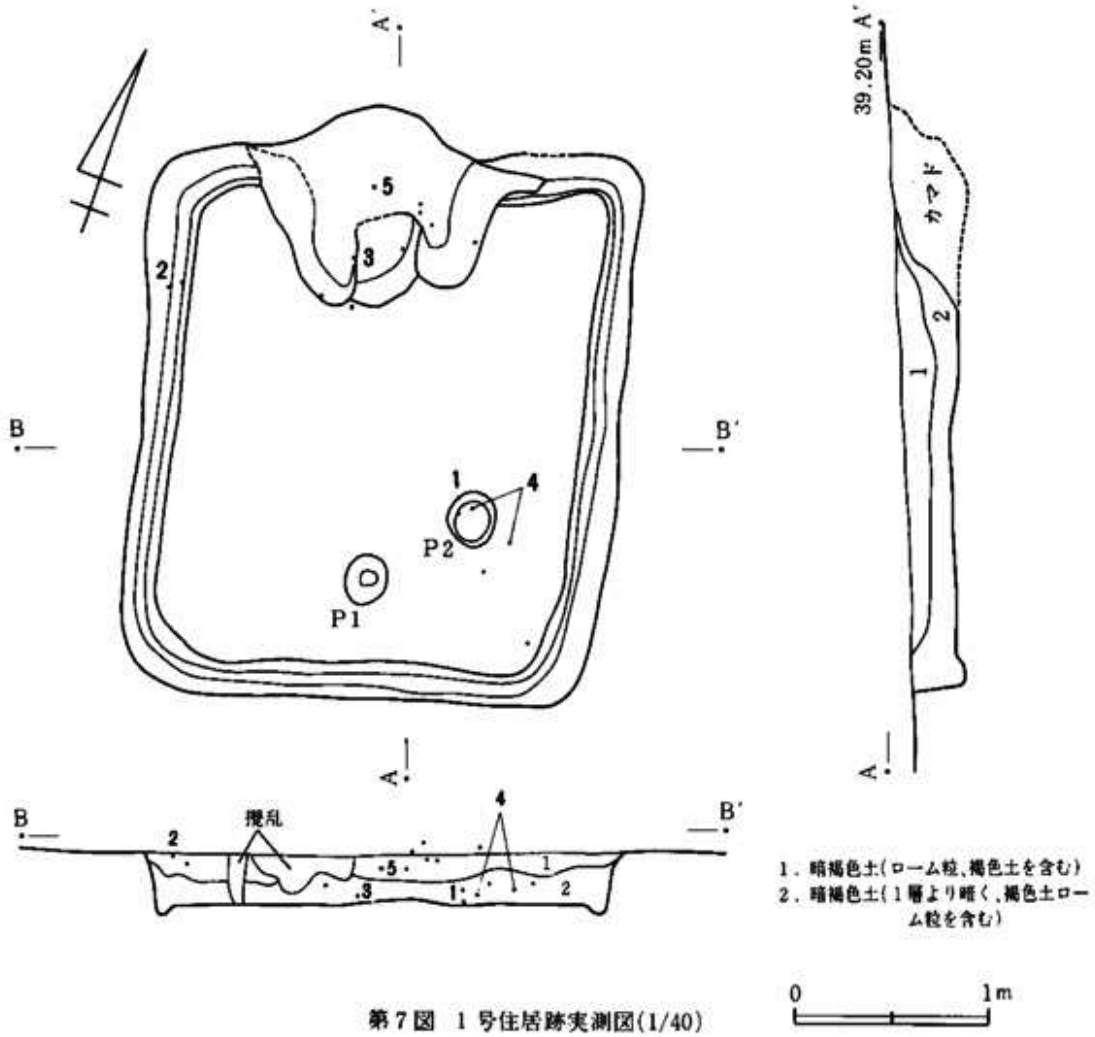
遺物は，30点程出土している。破片が多くレベルは床面より浮いた状態で出土した遺物が多い。平面的にはカマド周辺に偏在する傾向である。

覆土は，2層に区分されたが暗褐色土が主体である。

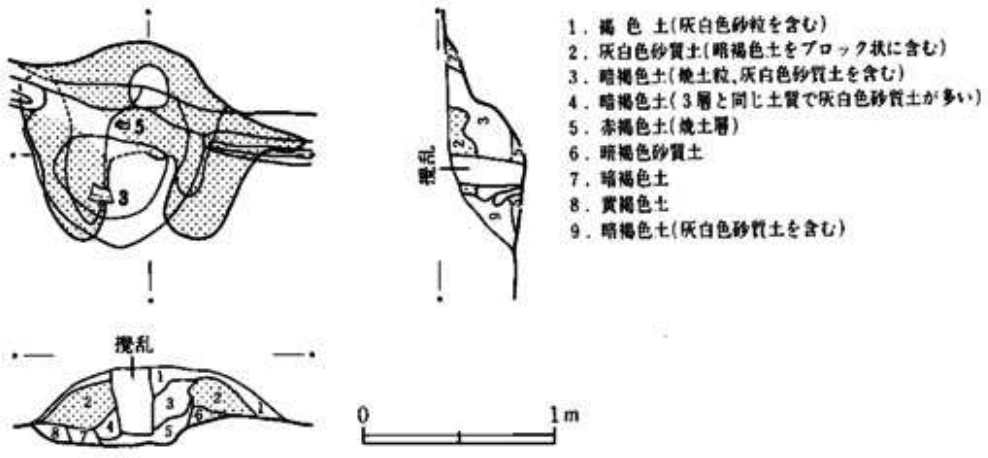
遺物（第9図・図版7）

出土遺物は，坏，甕，甑がありすべて土師器である。

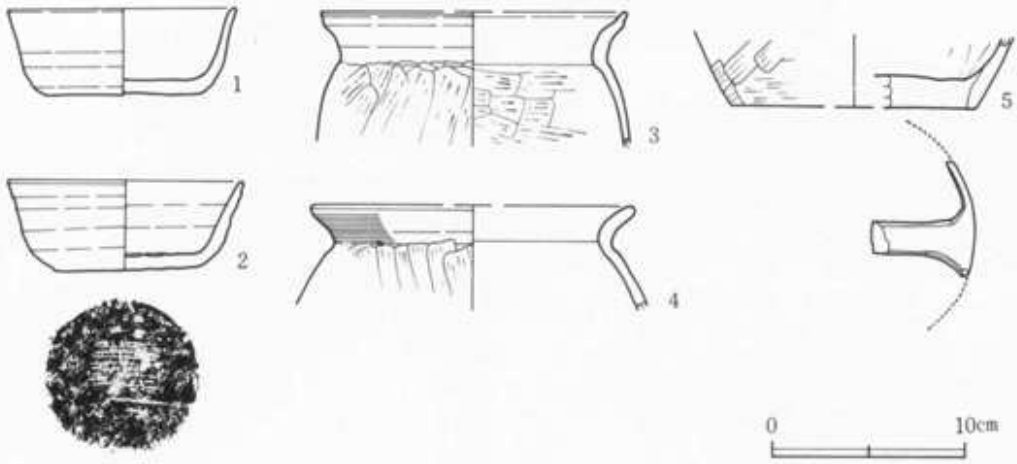
1，2は坏である。1はロクロ成形で丸みをもった体部から直線的に立ち上がり，口唇部でわずかに外反する器形となる。底部はやや上底状となり静止糸切り離しの後周縁を手持ちヘラ



第7図　1号住居跡実測図(1/40)



第8図　1号住居跡カマド実測図(1/40)



第9図　1号住居跡出土遺物実測図（1/4）

ケズリしている。口縁部約2/3が欠失し，推定口径11.7cm，底径8.0cm，器高6.7cmを測る。

内外面とも二次的に火熱を受けススが付着して器面が荒れている。胎土に砂粒を含み，焼成は良い。2はロクロによる成形痕が明瞭に残る坏で，張りのある体部下端から口縁部が直線的に立ち上がる。器壁は全体に厚く，一定している。底部は静止糸切り離しの後周縁を手持ちヘラケズリしている。底部周縁と体部との境に粘土のはみ出しによりくびれが生じている。ほぼ完形で口径12.1cm，底径7.6cm，器高4.8cmを測る。胎土に砂粒を含み，焼成は良好である。

3，4は小型の甕である。3は口縁部上端をつまみ出して，わずかに外反させている。胴部の張りは少なく，口縁部との境にヘラケズリ整形による稜を有している。整形は口縁部がヨコナデ，胴部外面は縦方向のヘラケズリ，内面は横方向のヘラケズリが施されている。口径は推定15.8cm，現存高7.05cmを測る。胎土に白っぽい砂粒を含み，焼成は良好である。4はやや張りのある胴部から口縁部が強く外反して口唇部に至る器形となる。口縁部は肥厚して丸みをもつ。整形は口縁部ヨコナデ，胴部は外面縦方向のヘラケズリ，内面はヨコナデがされている。口縁部から胴上半部の破片で推定口径16.8cm，現存高5.45cmを測る。胎土にわずかに砂粒を含み，焼成は良好である。

5は甑の底部破片である。外面は底部周縁を横方向に，胴部下端に斜方向のヘラケズリ整形をおこなう。内面はヘラナデ整形である。底は穿孔され，十文字の底部となる。胎土に細砂粒を含み，焼成は良好である。推定底径12.7cm，現存高3.8cmを測る。

3　土壙

1号土壙（第10図・図版4）

本土壙は調査区西端の台地斜面，2E－04，09グリッドにまたがって検出されている。検出面は新期テフラ層下面である。平面形はやや歪んだ楕円形を呈し，規模は長軸2.39m，短軸1.76

mを測る。壁の立ち上がりは底面より垂直になった後，上面にむかって大きく広がるロート状を呈している。底面はハードローム層に達しており，平面形は長方形で89×35cmを測る。平坦で堅い底面である。深さ1.165mを測る。出土遺物はない。

覆土は遺構内で9層に区分できた。5層暗褐色土，6層黒褐色土，8層暗褐色土，9層褐色土が主体を占め，自然堆積の状態である。

2号土壙（第10図・図版4）

本土壙は6号墳の西側1C－20グリッドに位置する。検出面は新期テフラ上面である。底面が二段に掘り込まれ，壁の一端がオーバーハングして立ち上がる形態の土壙で，上端での平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長軸1.17m，短軸0.65mを測る。底面の平面形は，隅丸方形となり，長軸方向で92cm，短軸方向で82cmを測る。上端より垂直に下ろした線上から奥行き33～21cm，確認面からの深さ88.5cmを測る。底面は両段ともほぼ平坦である。出土遺物はない。

覆土は5層に区分されたが，中位の層の堆積状態がブロック状となっており，一般的な自然堆積の状態とは異なっている。

3号土壙（第10図・図版5）

本土壙は調査区の北側端1C－07グリッドに位置する。一部は調査区域外に延びるため全体を調査できなかった。底面が2号土壙と同様に二段に掘り込まれ一方の壁下に奥まる形態をもつ。平面形は隅丸方形ないし隅丸長方形になるものと思われる。調査した範囲は上端で長軸方向1.97m，短軸1.31mを測る。ほぼ北に長軸方向をもつ。東側の壁の立ち上がりは垂直に近いが西側は底面からフラスコ状にオーバーハングして立ち上がり上端で大きく開いている。底面は東壁から続く一段目では傾斜をもち，奥部の西壁下二段目では平坦であり，全体に堅い。深さは，新期テフラ上面より一段目で1.46m，二段目で1.90mを測り，段差は0.44mである。遺物は出土していない。

覆土は12層からなる。褐色土，暗褐色土が主体である。

4号土壙（第11図・図版5）

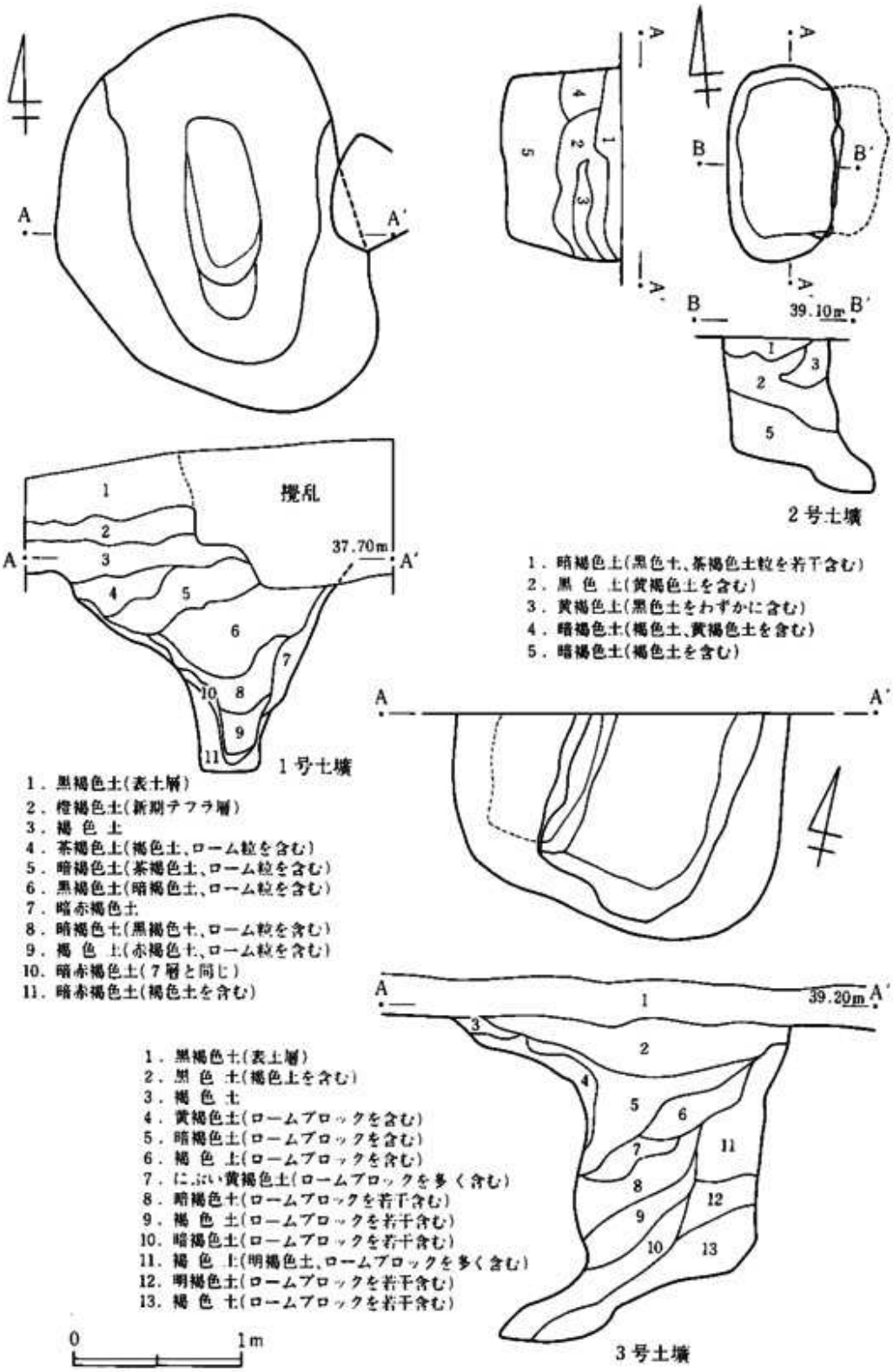
本土壙は6号墳の南西側2C－20グリッドに位置する。検出面は新期テフラ層上面である。上面に耕作による攪乱を受け南側は壁の遺存が悪い。

平面形は不整の方形を呈する。規模は長軸2.56m，短軸2.26m，深さ1.26～1.08mを測る。底面は起伏があり，東西の長軸側がフラスコ状に広がる。壁の立ち上がりはオーバーハングぎみとなり，上端近くで垂直になる。出土遺物はない。

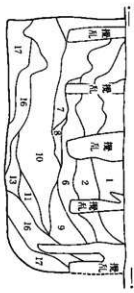
土層の堆積状況はレンズ状堆積のような自然堆積の状況ではなく，複雑な堆積状況を呈している。特に覆土の中層までが顕著で，他の土壙とは異なる堆積状況である。

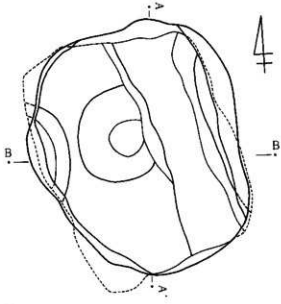
5号土壙（第11図・図版5）

本土壙は4号土壙のやや北側2C－15グリッドに位置する。検出面は新期テフラ層上面である。

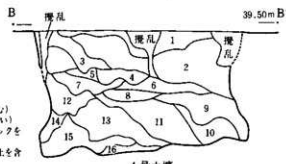


第10図　1，2，3号土壌実測図 (1/40)

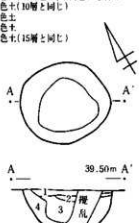




1．黒 色 土
2．暗褐色土(ロームブロック，ローム粒を含む)
3．暗褐色土(ローム粒若干含む)
4．黒褐色土(ロームブロックを含む)
5．黄褐色土
6．茶褐色土(ロームブロックを含む)
7．褐 色 土
8．黒褐色土
9．暗褐色土(茶褐色土，ロームブロックを若干含む)
10．茶褐色土(6層に似るがロームブロックは少ない)
11．茶褐色土(全体に明るく黄褐色土，ロームブロックを含む)
12．黄褐色土(全体にロームブロックが占め，褐色土を含む)
13．黒褐色土(暗褐色土，茶褐色土を含む)
14．茶褐色土(10層と同じ)
15．黄褐色土
16．暗褐色土
17．黄褐色土(15層と同じ)

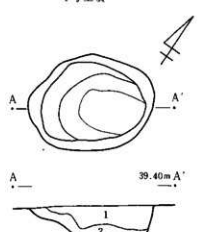


4 号土壙



5 号土壙

1．黒褐色土
2．茶褐色土
3．黒褐色土(ローム粒を含む)
4．褐 色 土(黄褐色土を含む)



6 号土壙

1．暗褐色土(ローム粒を含む)
2．褐 色 土(黄褐色土，ローム粒を含む)

第11図　4，5，6号土壙実測図 (1/40)

平面形はほぼ円形を呈し，規模は長径0.95m，短径0.83m，深さ42cmを測る。底面は軟質でわずかに起伏があり，南隅で最も深い。

覆土は，黒褐色土，茶褐色土，褐色土である。一部上面から攪乱を受けている。

遺物は覆土中より古墳時代後期と思われる赤彩された坏の小破片が出土しているが，遺構との関連は少ないと思われる。

6号土壙（第11図・図版6）

本土壙は6号墳の西側2C－06グリッドに位置する。検出面は新期テフラ層上面である。

平面形は楕円形を呈し，規模は長径1.33m，短径0.98m，深さ38cmを測る。底面は南西から北東へ長軸方向に沿って徐々に深くなっており，最下底面は平坦である。全体に軟質である。

遺物は，出土していない。

覆土は，暗褐色土，褐色土に区分された。

7号土壙（第12図）

本土壙は，6号墳の西側2C－00グリッドに位置する。検出面は新期テフラ層上面である。平面形は楕円形を呈し，規模は長径1.70m，短径0.89m，深さ24cmを測る。壁の立ち上がりは垂直に近く，底面は軟質でわずかに起伏が認められる。遺物は出土していない。

覆土は3層に区分された。黒褐色土，暗褐色土，明褐色土である。

8号土壙（第12図・図版6）

本土壙は，6号墳北側1C－18グリッドに位置している。検出面は新期テフラ層上面である。

平面形はほぼ楕円形を呈し，規模は長径0.87m，短径0.65m，深さ32cmを測る。底面は軟質であるが，平坦である。壁の立ち上がりは垂直に近い。

覆土は単一層で黒褐色土である。

遺物は出土していない。

9号土壙（第12図・図版6）

本土壙は8号土壙の東に接近し，1C－14グリッドに位置する。検出面は新期テフラ層上面である。

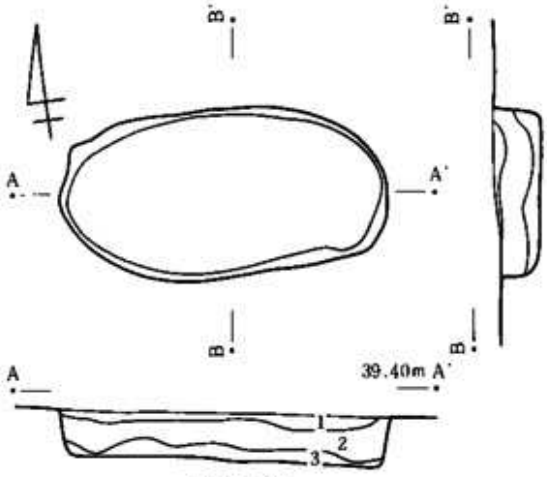
平面形は歪みのある楕円形を呈し，規模は長径1.67m，短径1.17m，深さ30～17cmを測る。底面は軟質で，北側が一段低く掘り込まれている。壁の立ち上がりは北側で垂直に近く，南側で緩やかである。

覆土は2層に区分されるが，暗褐色土が主体である。

遺物は出土していない。

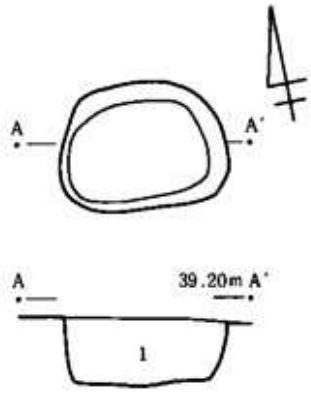
10号土壙（第12図・図版7）

本土壙は6号墳の北東側1B－06，07，11，12グリッドにまたがって位置する。検出面は新期テフラ層上面である。



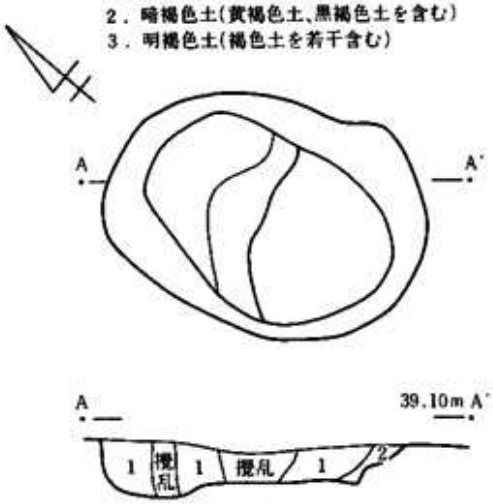
7 号土壙

1．黒褐色土(暗褐色土を含む)
2．暗褐色土(黄褐色土、黒褐色土を含む)
3．明褐色土(褐色土を若干含む)

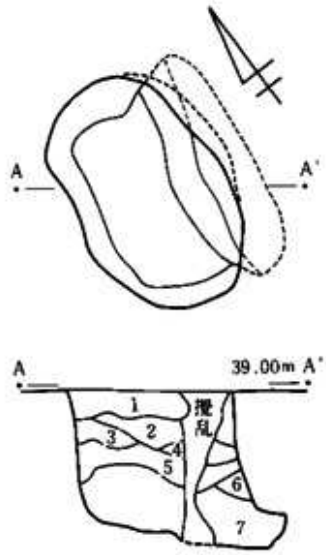


8 号土壙

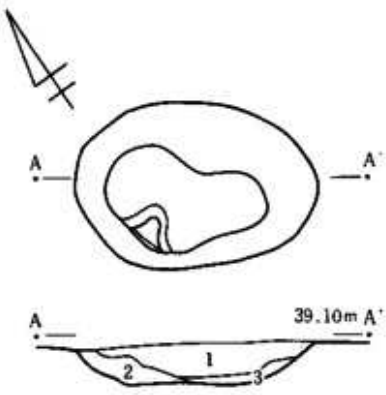
1．黒褐色土(褐色土、黄褐色土を含む)



9 号土壙



10号土壙



13号土壙

9号土壙土層
1．暗褐色土
2．暗黄褐色土

10号土壙土層
1．暗褐色土(ローム粒を含む)
2．明褐色土(ロームブロックを多く含む)
3．暗褐色土
4．暗褐色土(褐色土を含む)
5．黒 色 土(ローム粒を含む)
6．黄褐色土
7．褐 色 土(ローム粒、ロームブロックを含む)

13号土壙土層
1．黒褐色土(褐色土、ローム粒を含む)
2．黒褐色土(褐色土を多く、ローム粒を若干含む)
3．暗赤褐色土(褐色土を含む)

第12図　7，8，9，10，13号土壙実測図 (1/40)

平面形は歪んだ楕円形を呈し，横断面は片方の壁から底面が奥に入り込む袋状で，２号土壙と同様の形態である。規模は上面で長径1.27m，短径0.83m，深さ80.5～68.5cmを測る。底面は，平面形が東壁奥に広くなる台形状となり，長軸97cm，短軸83cmを測る。奥まった底面は一段低くなり，比高差12cmとなる。全体に硬質である。壁は東壁側で鋭くオーバーハングし，他は垂直に近い立ち上がりである。

覆土は７層に区分された。暗褐色土，黒色土，褐色土が主体である。

遺物は出土していない。

11号土壙（第13図・図版７）

本土壙は，６号墳の東側２Ｂ－01グリッドに位置する。検出面は新期テフラ層上面である。

平面形は隅丸長方形を呈する。土壙は全体に階段状に掘り込まれており，規模は外側で長軸3.14m，短軸2.12m，深さ1.36m，内側で長軸2.27m，短軸1.05mを測る。南壁側の階段部には幅36～29cm，長さ42～37cmの掘り込みが２か所造られている。底面には横方向（短軸）に平行して２か所の溝が切られており幅42～36cm，深さ６cmを測る。全体にしっかりとした掘り方である。遺物は出土していない。

覆土は６層に区分された。流れ込みの堆積状況は黒褐色土で，褐色土が主体である。

12号土壙（第13図・図版８）

本土壙は，調査区の東南端３Ｂ－07グリッドに位置する。検出面は新期テフラ層上面である。

平面形は歪んだ長楕円形を呈し，規模は長径2.22m，短径1.34m，深さ0.84mを測る。壁の立ち上がりは東側で緩やかであり，西側はオーバーハングして上端近くで大きく外側に開いている。横断面は，一方が奥に入り込んだ形状となる。底面は高低差５cm前後の起伏があり，壁側に比べ中央部がやや高くなっている。また西壁寄りに8～4cmの厚さで炭化材が堆積していた。

遺物は出土していない。

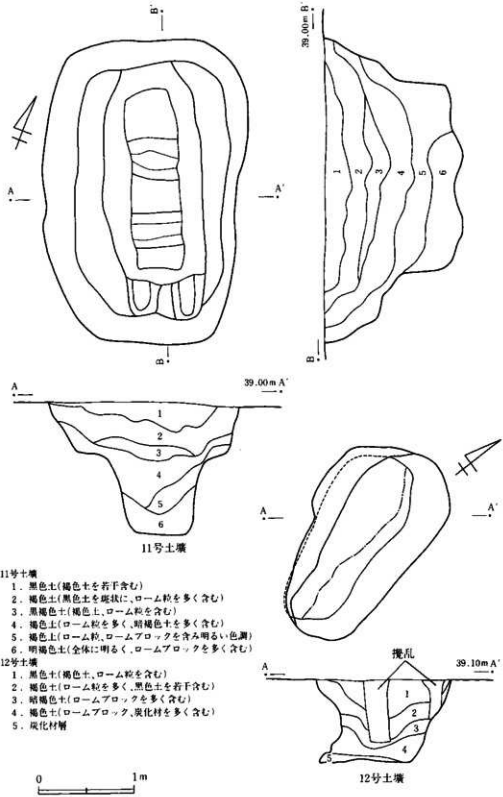
覆土は４層に区分された。黒褐色土，褐色土，暗褐色土が主体である。

13号土壙（第12図・図版８）

本土壙は２号土壙の東南に近接し１Ｃ－20グリッドに位置する。検出面は新期テフラ層下の暗褐色土層である。

平面形は楕円形を呈し，規模は長径1.26m，短径0.85m，深さ0.21～0.19mを測る。底面はわずかに起伏があり西隅では10cm程高くなっている。全体に軟質で，壁の立ち上がりは緩やかである。遺物は出土していない。

覆土は３層に区分された。黒褐色土，暗赤褐色土が主体である。



11号土壙
1．黒色土(褐色土を若干含む)
2．褐色土(黒色土を斑状に、ローム粒を多く含む)
3．黒褐色土(褐色土、ローム粒を含む)
4．褐色土(ローム粒を多く、暗褐色土を多く含む)
5．褐色土(ローム粒、ロームブロックを含み明るい色調)
6．明褐色土(全体に明るく、ロームブロックを多く含む)

12号土壙
1．黒色土(褐色土、ローム粒を含む)
2．褐色土(ローム粒を多く、黒色土を若干含む)
3．暗褐色土(ロームブロックを多く含む)
4．褐色土(ロームブロック、焼化材を多く含む)
5．焼化材層

0　1m

第13図　11，12号土壙実測図（1/40）

4　グリッド出土の遺物

石器（第14図・図版10）

すべて石鏃である。1は基部に浅い抉りをもつ。先端を欠失しており，周縁に入念な調整が施されている。形状は二等辺三角形を呈し，現存長2.2cm，幅1.28cm，厚さ0.3cmを測る。石質は安山岩である。2～4は抉りが無いか，きわめて浅いもので形状が二等辺三角形を呈する。基部の剝離が側縁にくらべて粗い調整である。2は長さ2.2cm，幅1.2cm，厚さ0.31cm，黒曜石。3は長さ1.7cm，幅1.1cm，厚さ0.3cm，チャート。4は長さ1.7cm，幅1.05cm，厚さ0.24cm，チャートである。5は抉りがきわめて浅く，形状は正三角形に近い形である。石英質で長さ1.2cm，幅0.9cm，厚さ0.2cmである。

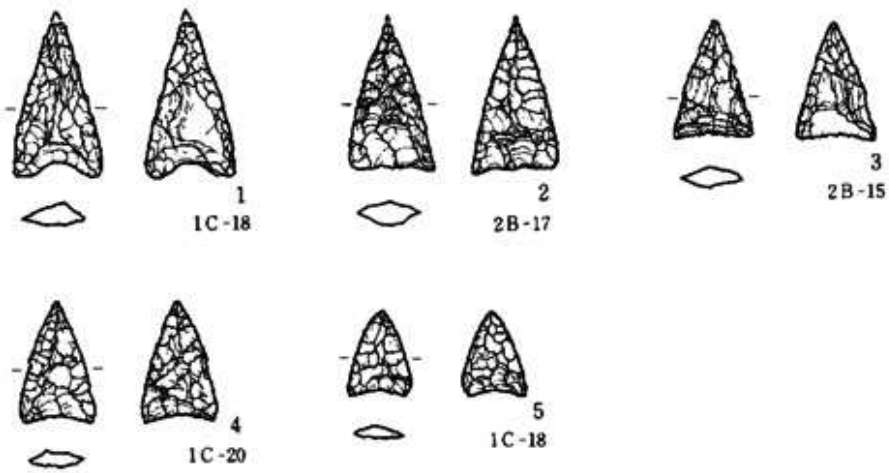
縄文式土器（第15図・図版10）

1は口唇部が肥厚して外反する口縁部である。口唇部端から施文原体Rの撚糸文が施される。胎土には砂粒を含み，色調は褐色を呈する。

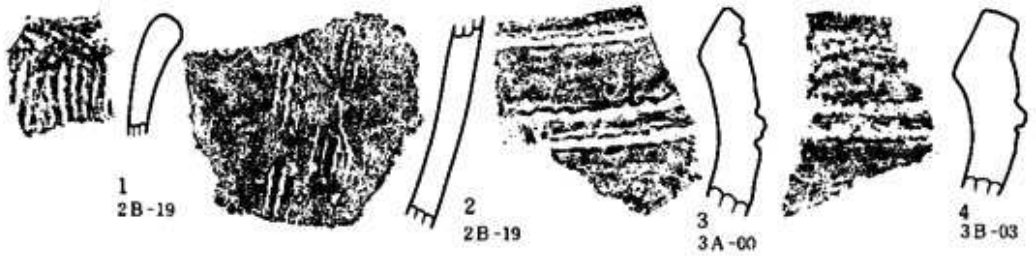
2は胴部破片。器面全体が荒れて文様は明確ではないが施文原体Lの撚糸文が施されている。胎土には砂粒を含み，色調は褐色を呈する。

3，4は口縁部破片である。厚く内湾した口縁部で，口唇部がわずかに外反し，内面に稜を有する。口唇部1条，その下に2条の結節沈線を施し，下端では沈線間が低い隆線状になっている。胎土には雲母粒を含み，色調は明褐色を呈する。

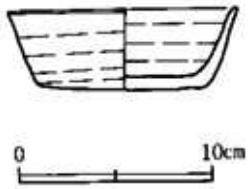
以上，1，2は早期撚糸文系土器に，3，4は中期阿玉台式に比定される。



第14図　グリッド出土の石器実測図（2/3）



第15図　グリッド出土の縄文式土器拓影図(1/2)



第16図　遺跡南側での表採土器実測図（1/4）

表採品（第16図・図版９）

土師器の坏形土器で調査区南側の畑で表採したものである。ロクロ成形で，平底の底部から体部が直線的に開き口縁部がわずかに外反する器形である。体部と底部との境がやや甘く，体部下端から底部を回転ヘラケズリする。外形は箱状を呈する。完形で口径11.9cm，底径8.8cm，器高4.2cmを測る。胎土に砂粒を含み，色調は明褐色を呈する。

第3章　まとめ

本遺跡の調査の結果，遺構は古墳1基，住居跡1軒，土壙13基が検出された。古墳は外部台古墳群のうちの1基として把えられるが封土，主体部ともに遺存状態が悪く築造時の様相を把握できる状態ではなかった。2基の重複する周溝は北辺と東辺をほぼ共有しているが土層の観察により1号周溝から2号周溝への時間的な変化が認められた。この時点で墳形も大形から小形の方墳へ変化していったものと思われる。主体部は1基検出されたが周溝の方位からみると1号周溝と同じ方向にあることから，当初の築造時に掘り込まれ，2号周溝築造時もそのまま追葬形態をとって利用されたとも推測される。埋葬施設は，土壙内に遺存していた雲母片岩を部材として用いたと思われる。形態的には土壙の状況から箱式石棺を用い，棺内の床面に片岩片を敷きつめていたと推定される。遺物は須恵器甕の破片，鉄鏃，刀子が出土しているが，いずれも断片的であるため，古墳築造の時期を明確に把えることは困難である。鉄鏃の形態から古墳時代後期の古墳として把えたい。

住居跡は調査区の南端で検出された1軒である。平面形が隅丸長方形を呈する小形の住居跡で，カマドを北壁中央に設けてある。柱穴はカマド対面に2か所存在している。出土遺物は土師器坏，甕，甑がある。土師器坏は，ロクロ成形であり，底部との口径の差が少なく箱形に近い形態で体部に弱い稜を有する。底部は回転ヘラケズリする坏と静止糸切りの後周縁部を手持ちヘラケズリする坏がある。これらの特徴は八千代市村上込の内遺跡，成田市妙福寺裏遺跡等で類例が認められる。時期的には平安時代，8世紀末から9世紀前半(注1)にあたるものであろう(注2)。集落については調査区域の南側台地平坦面に表採土器を含めて当該期の土器片が散布していることからこの方向に展開しているものと思われる。

土壙は調査区全体に分布している。1号土壙が台地西側斜面に存在する他は，古墳の周辺に分布している。13基の土壙のうち2，3，10，12号土壙の4基は底面が一段深く片方の壁側に掘り込まれる“半地下式”形態を有するもので特徴のある掘り方をとっている。この土壙の特徴をみると規模は3号土壙が未調査の部分が存在するが最も大きく，2号土壙が最も小さい。平面形は隅丸長方形ないし長楕円形に近い形を呈する。深さは3号土壙で1.90m，2号土壙で0.88mを測る。底面の一段低い部分は平坦で幅は0.90m前後と一定している。遺物は全く出土していない。覆土は半地下の底面の方向に傾斜して堆積しており，2号土壙では自然堆積とは認めがたい状態を示している。また12号土壙では底面一面に炭化粒が一定の厚さで堆積し，土壙内では焼けた痕跡は認められない。以上の特徴がこの土壙の性格を知る上で重要な手がかりとなるが，最近の調査例でこの種の土壙が認められつつあり佐倉市星谷津遺跡，立山遺跡，千葉市六通神社南遺跡他で類例が検出されている。星谷津遺跡では出土遺物の検討から8世紀後半の年代が与えられており(注3)，土壙墓として性格付けをおこなっている。渡辺修一氏はこの(注4)“半地下

式”の形態に“有天井土壙”の名称を与え，方形周溝遺構との関連性を指摘している。この土壙の他に11号土壙のように底面に溝を掘り込む形態をもつ土壙が検出されている。[注5] 酒々井町総合公園遺跡ではこの種の土壙3基が調査されており，半地下式状の土壙も伴出している。また佐倉市北大堀遺跡[注6]でも底面に溝をもつ土壙が数基認められている。北大堀例では地下式壙，方形周溝遺構[注7]が周辺にみられる。本遺跡で検出されたこれらの土壙はいずれも出土遺物がなく，その性格，時期共に不明な点が多いため，今後なお検討していく必要があろう。

注

注1　天野　努他『八千代市村上遺跡群』房総考古資料刊行会　昭50

注2　斎木　勝他「妙福寺裏遺跡」『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ－成田地区』(財)千葉県文化財センター　昭60

注3　渡辺修一　「群小区画墓」の終焉期（2）－「方形周溝遺構」における埋葬施設の新例とその検討『研究連絡誌』第14号　(財)千葉県文化財センター　昭60

注4　大原正義他　『佐倉市星谷津遺跡』(財)千葉県文化財センター　昭53

注5　注3に同じ

注6　高野博光他　『酒々井町総合公園遺跡発掘調査報告』酒々井町教育委員会　昭55

注7　(財)千葉県文化財センター　昭和59年度調査

その他参考文献

村田一男他　『千葉県香取郡多古町坂並白貝古墳群発掘調査報告－坂並白貝20，21号墳・17，18号墳－』多古町教育委員会　昭53

椙山林継・笹生衛他　『十老山古墳発掘調査報告書』小見川町遺跡調査会　昭59

金丸　　誠　『佐倉市立山遺跡』(財)千葉県文化財センター　昭58

写真図版

1.外部台遺跡遠景　　南西より

2.外部台遺跡近景　　南東より

1.外部台６号墳
主体部断面

北西より

2.同，主体部底面
検出状況

東より

3.同，主体部完掘
状況

南より

1.外部台 6 号墳全掘状況　　南より

2.同，周溝北側
掘り込み状況

東より

3.同，周溝東側
掘り込み状況

南より

1. 1 号住居跡全景　　南より

2. 1 号土壙全景

北西より

3. 2 号土壙全景

西より

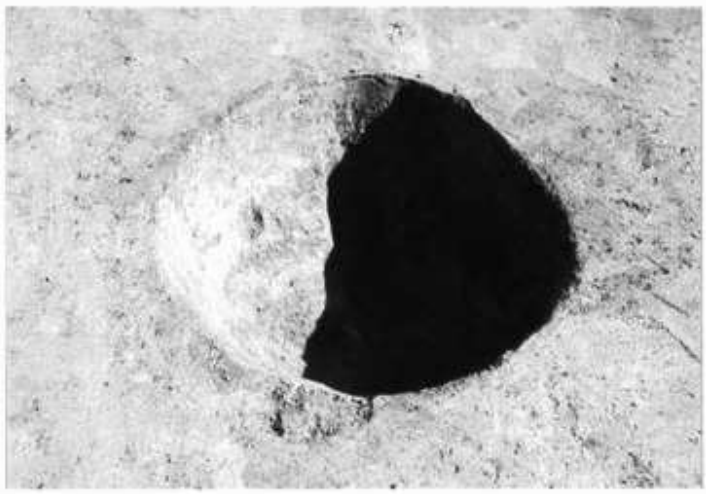
1. 3号土壙全景

東より

2. 4号土壙全景

東より

3. 5号土壙全景

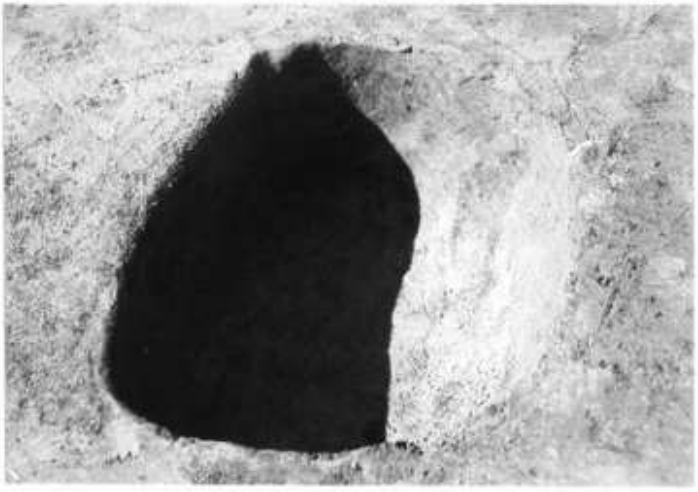


西より

1．6号土壙全景

西より

2．8号土壙全景



東より

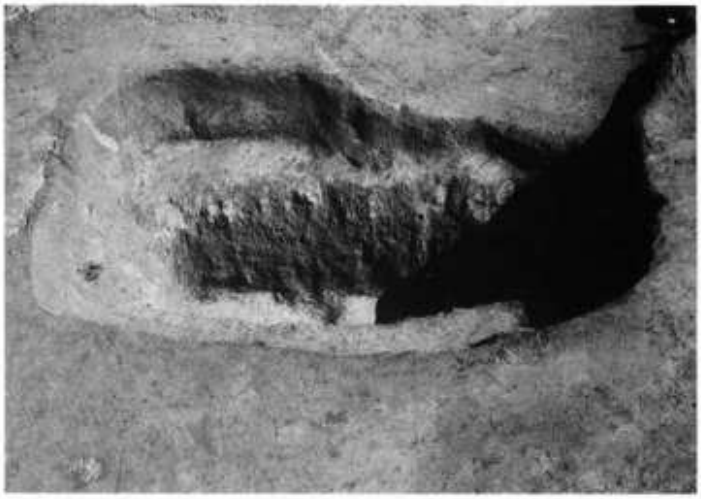
3．9号土壙全景

東より

1.10号土壙全景

西より

2．11号土壙全景



西より

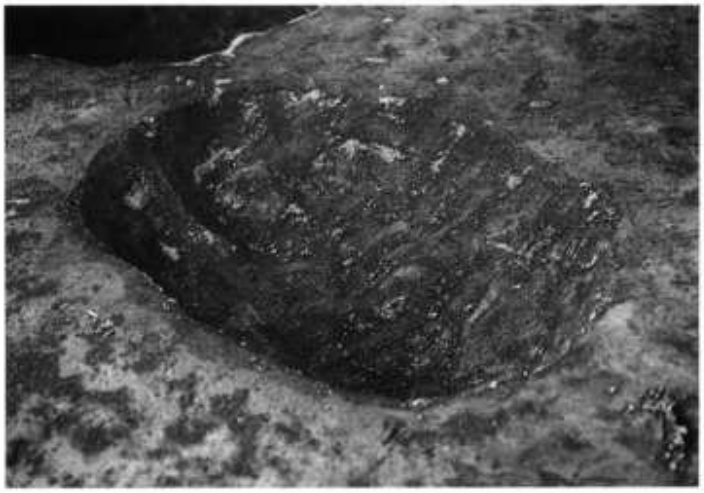
3.同南側壁面
掘り方状況

北より

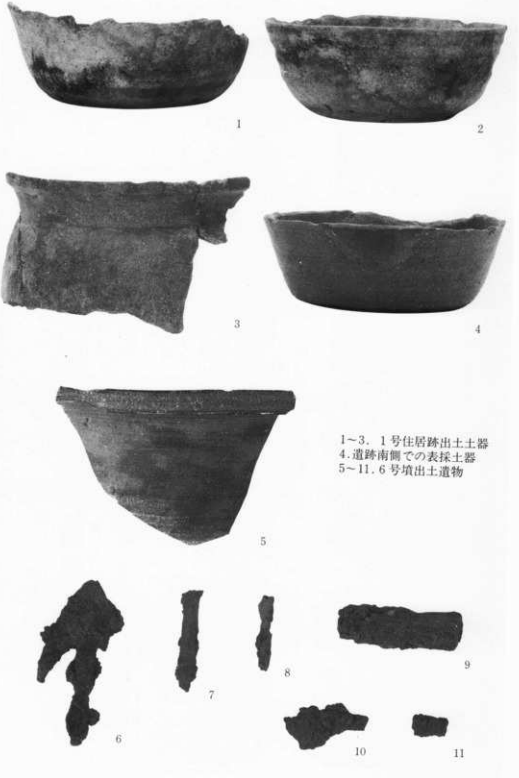
1.12号土壙全景

南東より

2.13号土壙全景

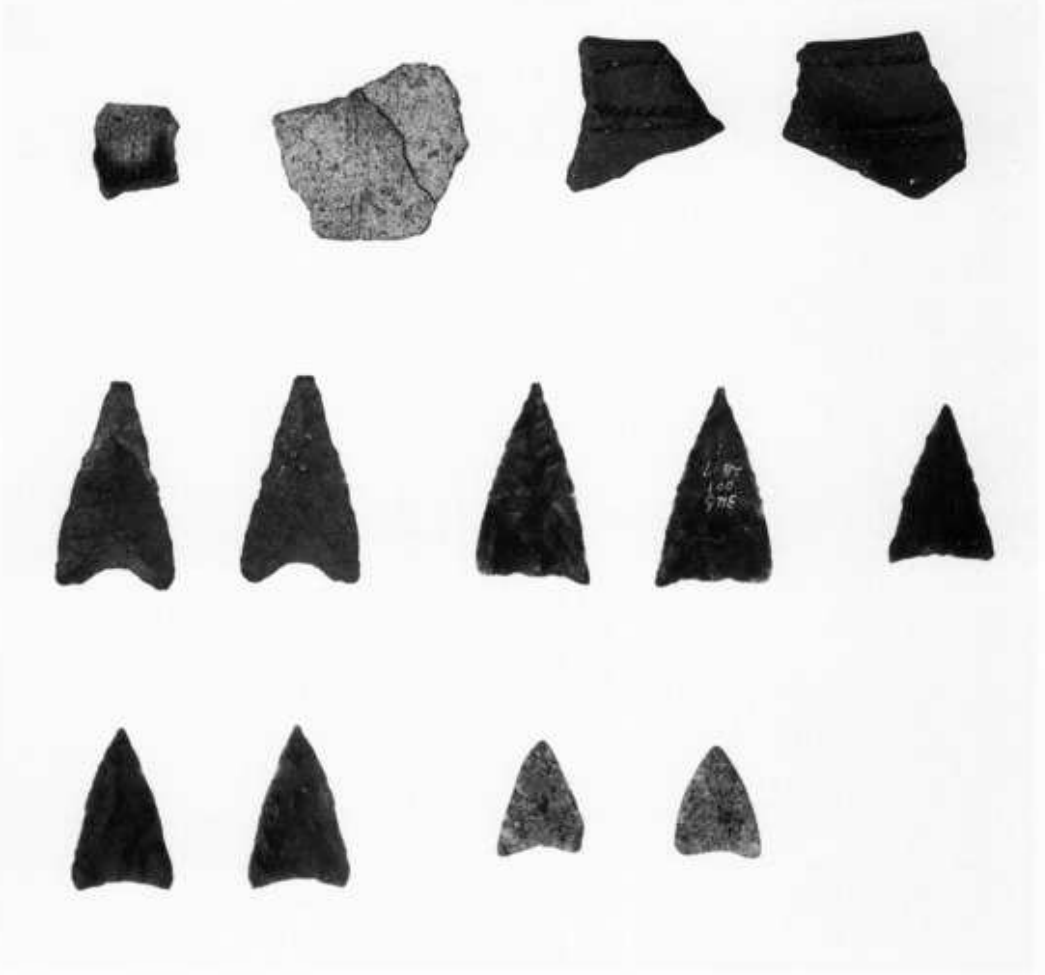


南東より



1～3．1号住居跡出土土器
4．道跡南側での表採土器
5～11．6号墳出土遺物

道構出土及び表採の遺物



グリッド出土の遺物

栗源町外部台遺跡

主要地方道成田・小見川・鹿島港線
事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書

昭和61年3月20日　印刷
昭和61年3月31日　発行

発行　千葉県土木部
千葉市市場町1番1号

編集　財団法人　千葉県文化財センター
千葉市葛城2丁目10番1号

印刷　有限会社　正文社
千葉市都町2丁目5番5号

栗源町外部台遺跡　正　誤　表

頁	行	誤	正
	図版目次　3	外台部	外部台
2	表1-№2	安　寺山塚群	安興寺山塚群
7	C-C′セクション	覚　乱	攪　乱
9	4行目	途切れる	跡切れる